

第 2 回町田市文化プログラム実行計画策定検討委員会 議事要旨

日時	2017 年 7 月 31 日（月）午後 6 時～8 時
会場	町田市役所 10 階 会議室 10-2・3
出席者	<p>■委員 香取幸一委員長、西田司副委員長、三上豊委員、岡田万里子委員、青島充宏委員、米増久樹委員、松香光夫委員、大久保明委員、仕田佳経委員、高野賢二委員</p> <p>■事務局 文化スポーツ振興部 能條、小田島 文化振興課 清水、戎谷、鈴木</p> <p>■運営支援 株式会社丹青研究所</p>
資料	<p>資料 1 2016 年度町田市主催事業（一部抜粋）</p> <p>資料 2 2016 年度町田市後援事業（一部抜粋）</p> <p>資料 3 町田市 5 カ年計画 17-21（一部抜粋）</p> <p>資料 4 既存事業発展型文化プログラムの考え方</p> <p>資料 5 モデル事業の考え方</p>

会議内容

1. 開会挨拶

*事務局より開会の挨拶および資料説明を行った。

2. 第 1 回検討委員会のふりかえり

*資料 1 から 3 について事務局から説明を行った。

■意見交換等

委員： 町田市 5 カ年計画 17-21 における町田市文化プログラムの位置づけを伺いたい。

事務局： 基本政策 2 の 1「誰もが文化芸術に親しめる環境をつくる」と基本政策 3 の 1「まちの魅力を高める」の両方にまたがる事業としてご理解頂きたい。

委員： 本件は町田市 5 カ年計画の策定後に検討しているので、あまりとらわれすぎなくても良いのではないかと。

事務局： あくまでも基本的な位置づけとしてご理解頂きたい。

委員： 基本政策 2 の 1「誰もが文化芸術に親しめる環境をつくる」は市民を意識した政策であり、基本政策 3 の 1「まちの魅力を高める」は外からの来訪促進を意識した政策ととらえることができる。

委員： 重点事業 1 オリンピック・パラリンピック文化プログラムの推進に対する、目標値について、とらわれる必要はないのか伺いたい。

事務局： その通りである。

委員： 数値は 2017 年度から 2021 年度までの 5 カ年分の目標という理解で間違いはないか。

事務局： その通りである。

委員： 町田市主催事業の全体件数について伺いたい。

事務局： 資料 1 は、町田市主催事業のうち文化的事業をほぼ網羅した内容となっている。

- 委員： 町田市文化プログラムにおける既存事業発展型は、これらの文化的事業がベースになると考えてよいか。
- 事務局： 概ねそのように考えている。
- 委員： 5カ年計画の数値目標は150件であるが、2020年までの3年間で150件を行うという目標になるのか。また、基本政策2の1「誰もが文化芸術に親しめる環境をつくる」と基本政策3の1「まちの魅力を高める」は、相乗効果も期待できるのではないか。
- 委員： 「まちだ〇ごと（まちだまるごと）大作戦 18-20」への市民参加の度合いも関係すると思われる。同事業との連携により市民の主体性を生かし、なおかつ、お金をかけずに市民が盛り上がることもできるのではないか。
- 委員： 「まちだ〇ごと（まちだまるごと）大作戦 18-20」は広報課の事業のことか。
- 事務局： その通りである。広報課の3カ年シティプロモーション担当が、市民協働での展開を予定している。
- 委員： 市民をどのように仕掛けるのが重要である。
- 事務局： 本格的な始動は2018年1月からとなるが、先駆けて8月6日にワールドカフェ方式による交流イベントを予定している。
- 委員： 町田市文化プログラムが市民のための事業であるならば、参加者数にこだわる必要はないかもしれない。しかし、もともと参加者数の少ない事業をどのように盛り上げるのかは検討する必要があるだろう。
- 事務局： 資料に記載の各イベントの参加者数は、規模による大小があると思われる。町田市文化プログラムとしては、全体的な参加者数でとらえたいと考えている。
- 委員： 政策には町田市発という文言があるが、町田市発以外の良質な文化芸術について、町田市文化プログラムとして取り上げることは想定されているか。
- 事務局： 町田市文化プログラムの基本的な考え方には、文化芸術によるまちづくりがある。そのため、鑑賞することに加えて、市民が参加することも文化振興には必要であると考えている。
- 委員： 市民に気づきを提供する文化プログラムと、良質な文化芸術との出会いを提供する文化プログラムとがあるのではないか。そのような視点を念頭に置きながら、事業の評価のあり方について検討する必要があると思う。
- 委員： 事業の選考には、本委員会が関連していくのか事務局に伺いたい。
- 事務局： 選考した事業に対し、補助金等の交付を考えるのであれば、選考基準の策定にご参加いただくことも考えられる。
- 委員： 「まちだ〇ごと（まちだまるごと）大作戦 18-20」は、全体をマネジメントする組織が必要である。町田市文化プログラムも参加者同士の交流を生み出すような組織をつくってはどうか。
- 事務局： 団体や人をつなぐ役割を、事務局が担う必要があると考えている。
- 委員： 庁内の枠組みを超えた担い手が必要というご意見か伺いたい。

- 委員： 大学生や高校生など、市民がその役割の担い手として参加できる体制が作られるとよいと思う。
- 委員： 資料 1、2 からは、町田市内で行われている文化的事業の内容が濃厚であることがわかる。ここに列記されている事業の主催者が、相互に連携するような情報提供も意味があるのではないかと。特に、町田市後援事業の実施団体は、すでにノウハウを持っており、町田市文化プログラムを展開するうえでは重要な存在である。それぞれの団体がインナーコミュニケーションを図れるような情報発信や、プラットフォームを作ることが必要ではないか。これらの活動を編集するような視点を持つためにも、情報提供が必要と考えられる。
- 委員： 町田市主催事業を見る限りでは、町田ならではの点が伝わってこないように思う。ナンバーワンという視点をもって検討してはどうか。
- 委員： いずれも結果的には二番煎じではあるので、このなかでナンバーワンを作るのは難しいのではないかと。参考ではあるが、コミュニティマガジン「まちびと」は、外から見た視点で編集されており興味深い。

3. 議事

(1) 既存事業発展型文化プログラムの考え方

*資料 4 について事務局から説明を行った。

■意見交換等

- 委員： 成果の蓄積として何らかのドキュメンテーションをつくることで、連携創出につながるのではないかと。市外を含めた広域的な連携に向け、冊子などの形で情報発信してはどうか。
- 事務局： 他市との連携というところまでは思いが至っていない。
- 委員： ドキュメンテーションは、これまでの取り組みを再評価することにもつながるのではないかと。
- 委員： 成果の蓄積は、事業として評価しづらいのではないかと。また、町田らしさという点では、様々なものがあり、特色がないというのも町田の特色だと思うが、それを町田らしさとして発信するのは難しいことかもしれない。
- 委員： クラフト工房 La Mano でも地域の商店街等と協力し、情報発信のための作品展示を行っている。既存事業の実施主体はノウハウがあり、町田市文化プログラムを展開するうえで重要な存在ではあるが、彼ら自身が発展することに価値を持っているかはさまざまであるため、慎重に検討する必要がある。また、発展を望んでいる事業主体については、その方法を検討する場がないというのも実情であり、異なる分野が交流する場の創出が必要だと思う。
- 委員： クラフト工房 La Mano の活動も、町田ならではのとしてアピールできるのではないかと。
- 委員： 昨年、国立新美術館で障がい者とアートやデザインの未来をめぐるプログラム「ここから - アート・デザイン・障害を考える 3 日間 -」が行われた。義足などのデザインから、障がい者による作品展示へと展開され、異なる分野の交流という意味において興味深い内容であった。

委員： 資料4のプログラムの新たな取り組み(例)における①子どもの参画促進としては、音楽座ミュージカルが市内の学校にアウトリーチ活動を展開している。②外国人に向けた日本文化に触れる機会の提供としては、ふれあい落語について、町田国際交流センターと連携し、英語落語を開催する予定である。③立ち寄りやすい場所での開催は、野外イベントの場合、天候や場所の使用許可等が懸念することから、積極的には取り組めていないのが現状である。④新たなコラボレーションは、15分以内のショートムービーを募集し、和光大学の先生に撮影技術の講習を行ってもらった事業を予定している。また、クラフト工房LaManoへ、コンサートと連携した作品展示について提案したことがある。

主催団体ごとに場所をおさえているので、連携というのはなかなか難しい現状がある。「とっておきの音楽祭 in Machida」では、ビジュアルにクラフト工房LaManoの作品を使用させていただき話もでており、そのような連携のあり方もあるのではないかと。

委員： 「とっておきの音楽祭 in Machida」は昨年につき2回目の開催となる。地元では開催していることを知らない方が多い。また、資料1、2を見ると町田市では音楽を軸としたイベントが多いのも特徴ではないか。これらを活かし、分野を超えた連携ができるのではないかと。

委員： 積極的に展開することで、二番煎じがナンバーワンになるのではないかと。

委員： 継続性という視点も、新たな視点という事になりうるのか。

事務局： その通りである。

委員： 既存事業をバージョンアップするためには、マンパワーが必要となる。高野委員のご意見にもあったが、義足のデザイナーと障がい者アーティストが対談するという内容でも、十分に新たな取り組みとして町田市文化プログラムになりうるのではないかと。また、それを情報発信するというのもよいのではないかと。

委員： ②外国人に向けた日本文化に触れる機会の提供を、異文化交流として捉えずに、新たな交流として捉えることで、全ての分野で展開可能となる。

委員： 事業に取り組む側にはマッチングはできないので、その方法を検討した方がよい。

委員： 「まちだ〇ごと(まちだまるごと)大作戦 18-20」との組み合わせによる展開も有効だろう。

委員： ホストタウンは、どのくらい広くとらえると良いのか伺いたい。

事務局： ホストタウン相手国は南アフリカであるが、拡大解釈すると②外国人に向けた日本文化に触れる機会の提供に発展できると考える。

委員： 外食産業企業では、食を通じた社会貢献を検討しているという。企業の協力を得ることで、南アフリカとの料理を通じた交流につながるのではないかと。

(2) モデル事業の考え方

*資料5について事務局から説明を行った。

■意見交換等

委員： 南アフリカには何度か訪れたことがあり、親しみ深い国なのだが、町田市におけるネルソン・マンデラ国際デーの認知度が低く、7月に行われたイベントも子どもの参加がほとんど見られなかった。まずは、写真展や紹介ムービーの上映など

を通して、親しんでもらう必要があるのではないか。

事務局： 現在、南アフリカをテーマに活動されている写真家に協力を打診しているところである。

委員： 町田市文化プログラムに共通するキーワードや、わかりやすいテーマのようなものが必要ではないか。そして、そのテーマを共通認識できるようなモデル事業の展開としてはどうか。

委員： 双方向性が必要ではないか、というご意見かと思うが。

事務局： 町田市文化プログラムは、基本的には6つの基本方針を柱がある。それらをふまえたキャッチコピーの検討も必要かもしれない。

委員： 基本政策2の1「誰もが文化芸術に親しめる環境をつくる」と、基本政策3の1「まちの魅力を高める」にも共通するようなキャッチコピーであることも必要かと思う。

委員： 教育という視点を町田市文化プログラムのなかに盛り込み、子どもたちに向けた取り組みを検討してはどうか。ただ、モデル事業そのものを本検討委員会で作成するのは難しいように思う。

委員： 何か1つのイベントをモデル事業とするのか、また、複数のイベントを含めた事業をモデル事業とするのかということも検討する必要がある。「二十祭まちだ」のように、若い人たちに提案してもらう方法もよいだろう。中心市街地では、多数の団体が協働した事業を展開するというのもよいだろう。市民を盛り上げるために、原町田大通りや公共施設を使った大々的な事業をモデル事業としてはどうか。

委員： 町田市主催事業を活用すれば庁内での説得もしやすいのではないか。

委員： 町田市国際版画美術館の町田市公立小中学校作品展のテーマとして、オリンピック・パラリンピックとしてはどうか。また、モデル事業をどのタイミングで行うかにもよるが、町田市の歴史辞典を全家庭に配布して、発想の糸口としてはどうか。

委員： 「二十祭まちだ」の際に、地域の歴史を学ぶきっかけとするのもよいかもしれない。

委員： 自由民権資料館等の情報発信を充実させてはどうか。

委員： モデル事業としては既存事業の活用が有効だと思うが、事務局のイメージがあるのであれば示してはどうか。

委員： 現段階ではテーマを絞る必要はないのではないか。また、町田市の文化が見えるような冊子を作ってはどうか。

委員： 「まちだ〇ごと（まちだまるごと）大作戦 18-20」に同調するのも良いかと思う。

(3) その他

*第3回検討委員会の開催日程について確認を行った。

事務局： 次回の委員会は8月22日（火）とさせていただきたい。